

思い出の南の島採集記

木下 賢司

原稿を書くことになったいきさつ

むしの会の谷角さんから、IRATSUMEに原稿執筆をとお勧めがあったのは、正月過ぎのことだった。

もともと怠け者の私には、これといった研究の成果があるはずもなく、珍しい虫の記録など記事になるものなどまるでなかったもので、即座にお断りしたのは言うまでもなかった。しかし、研究発表や記録の報告ばかりでなく、西表島や与那国島などの採集記といった形の、たまには肩の凝らない記事もあっても良いというお勧めであった。その折は、運悪くと言おうか、毎度のことと言おうか、少々酒が入っていたし、それに今年もまた総会へは失礼してしまったすぐ後だったので、「それでは一昨年、2度にわたって行った八重山諸島のことを書きましょう」と、安請け合いをしてしまったのが運の尽きで、一夜明けての後悔も後の祭り。とっくの昔に忘れてしまった記憶を、採った蝶のラベルの日時だけを最後の頼りに呼び起こし、たどたどしく原稿を書くはめになってしまった。

転職の今が絶好のチャンス、南の島へ

私事で恐縮ではあるが、1996年は、長年勤めたJRを退職し、同じ列車の運転という仕事には変わりはないとも、いわゆる第三セクターである北近畿タンゴ鉄道へ転職した年だった。

いくばくかの退職金も入り、この時とばかり、春3月と秋10月の2度、石垣島、西表島、竹富島、与那国島へと採集に行けた最良の年だった。しかしその年は、退職金は新築した家のローンの一括返済としてたちまちに消え、新入社員となって給料や年次有給休暇も大幅に減って、寂しい境遇に陥った年でもあった。年金制度は事あるごとに悪化していく中、近々には老人となり、年金だけを頼りに細々と生きていかなければならない私や妻のことを思うとき、もうとても行けそうもない南の島への断ち切れない思いと、楽しくも懐かしい思い出を次に綴った。

今度こそ無事着陸、与那国島へ

1996年10月21日、JAT日本トランスオーシャン航空、YS865便は定刻の16時15分過ぎ、雲が厚く流れ

の速い、やや荒れ模様の与那国空港に無事着陸した。

その年の3月25日、ちょうど今日と同じ便だった飛行機は、濃い霧の中2度までも着陸を断念し、形ばかりの3度目の着陸体勢をとった後、そのまま石垣島に引き返した。命は助かったとはいえ、結句一番行きたかった与那国島へは行けず、以後の採集計画が大いに狂ってしまった苦い経験がある。

それにもまして、ほんの3ヶ月前の7月、ヒマラヤの高山植物、ブルーポピー（青いケシ）の花を見に旅立ち、インドの空に航空機事故で散った、3人の山仲間のことが頭をよぎって離れなかった。3人は私の生涯の山の仲間と思い、事情さえ許せば私もきっとインドと一緒にいき、あの世へも共に行っていたに違いない仲の良い仲間だったから、もしかして誘いにはこめかと心配で、無事の着陸はとても嬉しかった。

だいたい、鉄が空を飛ぶ飛行機や、水に浮ぶ船よりも、地を走る列車の方がどれほど理にかなっていて安全か知れないのだが、南の島行きの列車はないのでどうしようもなかった。

列車よ、お前もか！ 帰りのバスの大騒動

それほどまでに私が絶人なる信頼を寄せていた列車にも、春の嵐とかで見事に裏切られることになるとは、まだその時には知る由もなかった。

帰りの関西空港からの電車は、強風のため終日運転休止。30分に1本の大阪行きのバスには、何百人とも知れぬ人々の長蛇の列が続き大混乱で、翌朝に仕事を持つ私としては焦りに焦りまくって、順番のことであわや大喧嘩の大騒ぎをしながら、とにかく何とか大阪駅からの夜行列車に間に合うことができた。しかし、帰ったその朝は当然仕事で、大きな声では言えないが、その日の列車の運転の眠かったこと眠かったこと。そう言えば、勇んで立った与那国空港の悪天候は、前途暗たんたる運命を予感させるに十分な嫌な雰囲気ではあったが。

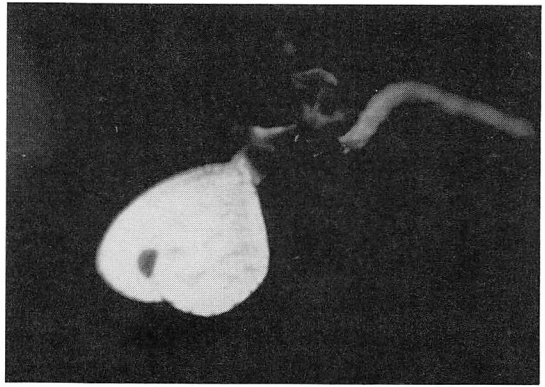
毎夜祝賀パーティー、前回の与那国島

与那国島へはこれが2度目で、その年より4年前の1992年6月、その時は同じJRの後輩であり、但馬むしの会会員でもある親友の福井丈嗣氏と一緒にだった。

その時は全行程中晴天に恵まれ、夢によく見たほど採りたかったタイワンシロチョウをまずまず採り、当たり年だったのか、迷チョウのはずのヒメアサギマダラを大量に採集出来るなど上々の成果をあげて、毎夜にわたり泡盛による祝賀パーティーを催した楽しい思い



与那国空港にて



クロテンシロチョウ

出がある。

その時は、民宿さし向けの車に荷を託し、空港から宿のある祖内まで歩いて採集をして、祖内入口のテンダバナの崖下では、タイワンシロチョウやツマベニチョウの乱舞を見上げて狂喜したものだ。しかし、今日はタクシーで、まだ小雨のパラついている祖内の入口に、寂しく降りた私だった。

だが、もうここまで来れば少しも慌てないのが南の島のベテラン採集者で、先ずは宿を吟味した結果、『中たけ荘』という民宿に今日と明日の宿を予約をすませた。また、すぐその足で、近くのバイクの店でバイクの予約も忘れなかった。もちろん、チョウの採集をしているというその店の主人の、若い無口なお父さんからチョウの最近情報を聞き出しておくことも忘れなかった。もっとも、情報と言っても、「最近は雨ばかりでダメ、明日も多分雨でダメ」というだけのすごいものだったが、もっとも、あの時私があんなに落ち着いていたのは、この天気では今日はとてもチョウどころではなく、少しも慌てる必要はなしというだけのことだったが。

恐ろしくも悲しかった、前回の与那国島の宿

ただし、落ち着いて宿を特に吟味して選んだのにはそれだけの訳があった。宿は古くても安ければ良いというものでは決してない。

それは初めて与那国島にきて泊まった宿の、恐ろしくも悲しい出来事を思い出すからだった。と言って、幽霊が出た訳ではないのだが。

屋根裏から時折聞える「ケケケケケ…」という不気味で怪しい何やらの泣き声（あとで聞けばヤモリの鳴き声）に寝つかれぬまま、喉の渇きに真っ暗な炊事場に素足で踏み入れた途端、『グジョー』といった感じ

で、何かを踏んだ何とも言えない気持ちの悪い感覚が足に伝わってきた。「ヒエー」とばかりに慌てて点けた灯りの下で、虫を集める私ではあっても、一番怖いゴキブリの、しかも九州以南に棲むというあの大きなワモンゴキブリが、足の裏にべったりつぶれて張り付いているのではないか。さらに恐ろしかったのは、気をとり直していった流し台に、隙間もないくらいにその虫が蠢いていて、水を飲む気力も失せ、部屋に逃げ帰ったものだった。

そして翌朝、もっととショックだったことは、昨日、宿に着くまでに採って展翅しておいたタイワンクロボシジミや、こともあろうに、苦勞して採ったタイワンアオバセセリまでも、どこから来たのか赤くて小さなアリに見事に胴体を跡形も残さずきれいに食べられていた辛い思い出があるからだった。

ああ無情、雨の中テンダバナへ

翌10月22日、あれほどに好天を祈り、お神酒も十分いただいて祈りつつ眠った私の耳に無情な雨の音。その日も朝から小雨で、風もかなり強い悪天候だった。

冗談ではない。休暇を無理を言ってもらい、楽でもない家計から、文句を言われつつやっと都合をつけて来たこの島で、「そうですか、では明日は是非良いお天気を」と、一日中宿で寝ていられるほど大らかな私では決してない。

仕方なく8時過ぎ、とりあえずバイク屋へと向かった。相変わらず無口で若いお父さんの主人から、「当分こんな天気が続くかも知れんけど、まあとにかくガンバッテね」といった意味の言葉と、哀れみとも励ましともとれる優しい微笑みに送られて、先ずは仕方なくテンダバナへと向かった。

テンダバナは祖内のすぐ上にそびえる100mほどの

岸壁で、岸壁が海に向かって長くの伸びている奇妙な地形である。その外見から、テンダバナとは天狗の鼻という意味ではないかと勝手に思っているが、なにしろ、与那国島に限らずチョウとは関係のない観光は二の次、三の次の私には分かるはずがない。

ただそのテンダバナの鼻の付け根辺りは、巨大な岩が底状に大きくせり出っていて、雨宿りになると思ったことと、以前来た日のその場所は、ハイビスカスの花が咲き乱れ、幾らでも来るツマベニチョウに狂喜し、しかも、ブルーに輝く迷チョウ、マルバネルリマダラを初めて採って大感激した思い出の地でもあった。

クロテンシロチョウだけの寂しいテンダバナ

田原川にかかる橋を渡ると、すぐにテンダバナへと続く急なコンクリート道となる。小雨が降り続き、風も相変わらず強く、とてもチョウの採集など考えられない悪天候だったが、ただ1種、クロテンシロチョウだけが林の中から地面すれすれにチョロチョロと幾らでも出てきた。4年前は、採集ガイドにも載っていないこのチョウを初めて採って大喜びをし、必死に捜し回ったチョウだけに、今度も大いに期待はしてきたが、こんなにこのチョウだけが沢山飛んでいてもどうしようもなかった。第一、このチョウは飛び方も頼りなく、見つけたら必ず採れてしまうという、採集には少しの緊張感も面白みもない。だが、このチョウのことを、悪天候の中を平気で飛んでいる変な奴だなどと決して思っただけではない。実はこの悪天候の中、ネットを持ってうろついている奴の方がもっと変なのだ。悪天にたたられて収穫の少なかった与那国島の採集では、終始大変お世話になり、お礼は言っても、決して変などと言っただけではない有り難いチョウであった。

庇の下は別天地、雨宿りのテンダバナ

テンダバナへの坂道を登り切ると、サトウキビ畑の広がる平坦な土地で、南からの強風と強い雨が一気に押し寄せてきて、とてもチョウなど採れるはずもない。ひとまずはテンダバナの付け根の、長くて巨大な岩の庇に雨宿りすることとした。大きな庇の下は思っていたとおりに雨も風もなく別天地で、外の荒れ模様は嘘のようだった。しかし、「もしかしていろいろなチョウも雨宿りに来ているかも」という考えは余りにも楽観的で、当然ながら甘い夢に過ぎなかった。仕方なく、庇の下にある与那国島の伝説的な女傑サンアイソパの碑や、民話などを刻んだ碑を読んだり瞑想に耽ったりして、人目には至極心穏やかに見えそうな私だ

った。

しかし庇に籠ること約2時間、我慢も限界を越え、雨が小降りになったのを見定めて、祖内の南、反対側の海岸にある比川へとバイクの音も高く飛び出した。

林内はチョウの吹き溜まりだったが

ザワザワと風の吹く広々としたサトウキビ畑を抜けると、道は林の中へと続いていた。

林の中は嘘のように静かで、いつの間にか雨も止み、リュウキュウアサギマダラとスジグロカバマダラがフワフワと幾らでも飛び回っていて、チョウの溜り場のようだった。現金なもので、今まで沈みがちだった私から鼻唄も飛び出し、「これでこそ与那国島だ!」とばかり上機嫌で、しばらくはせっせと三角紙にチョウを納めた。

しかし、こんなチョウばかりを採りにここに来たのではない。今回この島に来た真の目的は、タイワンシロチョウやツマベニチョウをもっと採り、前回は2〜3頭ずつだけ採れたタイワンモンシロチョウやシロミスジをもっともっと採りたかったし、なによりも、秋には数を増すという、あのピカピカに輝くルリウラナミシジミを大量に採ることと、迷チョウのマダラチョウの類、特にあの紫に輝くツマムラサキマダラを是非手にすることであった。

同病相憐れむ、雨の中の採集者との出会い

再び南へ向かって発進、比川へ。しかし、比川へ向かう途中から、マダラチョウ科の迷チョウの記録の多いという満田原林道へ入った。

その頃から再び雨足が強くなってきた。その時、雨を避けて身を寄せた木の下で光景こそは、まさに呉越同舟と言うのだろう。同じように雨を避けて寄ってきた沢山のリュウキュウアサギマダラと一緒に木陰に身をすくめるという、実に情けないことになってしまった。だが、何時までもそんなことをしているつもりも暇もない。雨が小降りになるのも待たずに、再び比川への道へ引き返した。

引き返す途中の道の側の広場で、この島に来て初めて、チョウの採集者に会った。その人は私と同年輩くらいに見えたが、雨のために私よりもっと途方に暮れたといった感じの人だった。聞けばなるほど、この島は初めての広島県からの人で、しかも、3日も前から雨ばかり、明日には帰らなければならないという、私よりもっと気の毒な人だった。そこはこの島の先輩として、『天気さえよければ与那国島はいい所ですよ、

またいらっしやい』と慰め、どうせお互いに雨の中、急ぐ旅でもなかったので、4年前の6月、晴天に恵まれて、あの輝かしい成果をあげた日のこの島でのことを長々と語り、お互いの健闘を祈って別れた。

天気も回復、勇んで西の久部良へ

比川まで行く元の広い道を走り、少し登り坂が続いたらそこは峠で、その向こうに白く煙った海が広がっていた。やがて、その海のすぐそばにある比川へ着いた。そこは家が何十軒あるだけの寂しい所だった。おそらく付近で一軒だけと思われる何でも屋で昼食を買ひ、今度は一路西へ向かった。

目指すは久部良。与那国島最西端というより、日本の最西端で、台湾から125kmしか離れていないという西崎のある所だ。因みに、西崎は「いりざき」と読み、与那国島の東の端にある東崎は「あがりざき」と読む。太陽の昇り沈みすることを言うのだろうが、よく分かって面白いと思った。

久部良港の近くの高台の岩礁の一角には、クブラバリという大地の引き裂かれたような地形がある。かつて人減らしのため、流産を目的として妊婦を飛ばせたという悲惨な話のある所だそうだが、雨も止み薄日の射し始めたその時、のんびりと観光をしていられるはずもなく、例によって先を急いだ。

お化けバツが一杯、満田原林道

久部良岳への登り口は、満田原林道の途中にある。この林道の入口は、比川へ向かう途中に入った、雨のために泣いたあの満田原林道の反対側の入口である。天気も良くなってきて、ワクワクしながらバイクを進めた。

時間は午後1時過ぎ、薄日も射し、もう雨も風も心配はないことを見極め、どうした訳か馬も牛も見られず、人の姿もない牧場のような所で遅い昼食をとった。もちろん、比川の何でも屋で買った大漁祈願の泡盛のお神酒を戴くことも忘れなかった。

しかしその願いも空しく、タイワンクズとおぼしき藪を叩いてみてもルリウラナミシジミはおろか、他のシジミやセセリ、ジャノメチョウ科に至るまでチョウはさっぱり飛ばず、第一ツマベニチョウの姿などは一度も見かけない寂しさだった。相変わらずリュウキュウアサギマダラとスジグロカバマダラ、それに例のクロテンシロチョウばかりが飛んでいて、どうやら今回の与那国島はとてものガイドブックにあるほどの夢の島でなさそうで、次第に夢がしぼんでいく私だった。

それに、以前この島に来た時にも気になっていたのだが、前回にも増して、トノサマバツの羽をずっと長くしたようで、もっと色が濃く、飛んだらスズメほどに見える大きいバツが島中どこでも見られ、この林道沿いの草原にも何百とも知れないほど多く群れ飛んでいた。もしかして、あの悪名高い飛蝗ではないかと思った。いずれにしてもこんな奴があんなにいては、農作物の被害は大きいに違いないと思った。まさか今回のチョウの不作とは関係ないのだろうが、憎らくなり、どうせ暇でもあったから、一体どんな顔をしているのか見てやろうと1匹捕まえると、やっぱり非行少年といった怖い顔をしていて、慌てて放りだしてしまった。

久部良岳への道は、林道から分かれて右に大きくカーブして伸びていて、500mほど登った所には車が入れぬようにコンクリートの杭を何本も立てたゲートがあり、そこには、「これより先、車は乗り入れ禁止」の表示があった。久部岳の山頂はすぐ先に見えていたが、どうせ何も採れそうもなく、歩いて行く気にはなれず、そこから引き返してしまった。

35年来の初恋のツマムラサキマダラとの出会い

下り始めてすぐ、例のお化けバツが特に沢山飛んでいた牧場跡のような広場のあたりで、バアッと突然に飛び出した黒っぽいチョウを見つけた。「なあんだ、リュウキュウムラサキか」と、それでもこの島に来てから初めてのチョウでもあり、「しめしめ」とばかりにバイクを止めて、チョウの止まるのを待った。しかしそのチョウは、いやにゆっくりとフワフワと舞っていた。その羽ばたきは明らかにマダラチョウのものであった。そして、その翅の紫の輝き。「ああ、もしかしてこれがツマムラサキマダラでは」と、高鳴る胸を抑え、慌てて出そうになる手をじっとこらえ、やっと下草に止まったそのチョウ目がけて、径50cmのネットを力いっぱい振り下ろした。ネットの中の紛れもないツマムラサキマダラのその胸を、震える指で何度も何度も抑える私だった。もしその一部始終を見ている人がいたら、私がとてもチョウ採集歴35年のベテランには見えなかったことだろう。

「嗚呼、その私の慌てふためきを笑うことなかれ」。このチョウこそは35年余り前、まだ高校生だった私が、ただその本だけを見たさに学校の図書室に通い、ため息をついては帰った横山光夫著「原色日本蝶類図鑑」850円也の、必ず開いたページの中のチョウ、ツマムラサキマダラだったのだ。

当時でもこのチョウは、迷チョウとして記されていたが、特に『雄は前翅の発光する藍紫の灯色もあざやかに、本邦に産する、オオムラサキ、コムラサキの雄の比ではなく、いかにも熱帯特有の毒々しいほどの美しさである』といったくんだり、何十回読んでもその度に私を興奮させずにはおかなかった。

「ああ、南の島にはこんなに美しいチョウが本当にいるのだろうか」。もちろん本物を採ることなど夢のまた夢、せめて本でもと思って、当時の850円が我が家の会計でどれほどのものかよく知っていたは、とても買って欲しいなど言えるはずもなかった。就職をして初めての給料でその本を買った時の喜びは、今でも忘れることはない。

今ごろになって悔やまれる久部良岳のこと

35年来の初恋のチョウとの出会いを果たして勇気百倍、しばらくは付近の草原を勇んで駆け回る私だったが、そんなには甘くないのが世間の常で、柳の下のだジョウはやっぱり1匹だけで、あの憎らしいお化けバツが幾らでも空しく空に舞うだけだった。

この文を書いているうちに気が付き、今頃になって悔やむのは、ずいぶん間の抜けた話ではあるが、なぜあの時、久部良岳へ登らなかったのだろうかということである。いろいろなチョウが山頂に集まることは、誰でも知っている常識である。きっとツマムラサキマダラも沢山飛んでいたに違いなかったのだ。ツマムラサキマダラを1匹採った時点でも、バイクでのことからゲートまで引き返せば良かったのだ。車は乗り入れ禁止とあったが、バイクまで禁止とは書いてなかったし、杭の間を楽に抜けて行けたはずだったのだ。2年も前のことを思い出し、「とにかくあの日は、朝から雨と風に疲れ、ツマムラサキマダラとの出会いで興

奮していたもんなあ」と、何度も自分自身に言い訳をしているおかしい私であった。

ああ、思い出の南の島

こんな調子で23日は、竹富島から西表島へ。24日は、西表島の白浜林道。25日は、仲間川林道。最終の26日は石垣島でと採集は続いた。西表島に着いたその夜の宿では、1年に1度だけ夜に一齐に咲き、朝にはしぼんでしまうという月下美人の花が、私を歓迎してくれるかのよう咲いて、その見事さに、「西表島は縁起がいいぞ」と大感激したが、その割には成績の良くなかったこと。それでも、白浜林道、仲間川林道ではツマムラサキマダラやマルバネルリマダラが少々採れ、たった1頭だけだがやっぱりピカピカのルリウラナミシジミも採れて、感激したことなど、まだ書きたいことは沢山ある。しかし、とても書き切れず、思っていたとおり、とうてい採集の案内役に立つようなものは書けそうもないので、このへんで筆をおきたいと思う。

これは南の島に来ていつも思うことであり、是非書き加えておきたいと思うのは、南の島の人達みんながとても明るくてとても優しく、心温まる人達ばかりだったということだ。こんなに南の島が私を引きつけるのは、美しいチョウが棲む島というだけでなく、きっと忘れかけている人間の優しさを思い出させてくれる人達の住む島だからに違いないと思っている。仲間川林道の奥で食べた、黄色い実のついたトケイソウの実、パッションフルーツのほのぼのと甘く、なにやら切なく懐かしい味と共に、私は南の島でのことを決して忘れることはない。

ああ、南の島に永遠の幸あれ。願わくばいつの日かまた、この我にあなたの地を訪れる幸せを与えたまえ。

但馬むしの会の年会費は3000円です。

**会費未納の会員は速やかに
お支払いください。**

**また、本誌に寄稿された方は、
原稿掲載料として
1000円をお支払いください。**

23号に向けて、カンバも募ります。

郵便振替は、

01120-3-16245、但馬むしの会、です。

但馬むしの会 会員募集

但馬むしの会では新入会員を募集しています。

**但馬の自然環境とそこで生活している昆虫、
様々な生き物たちに興味のある方、
是非入会してください！**

**あなたのお友達や、お知り合いにも
入会をおすすめください！**

入会の申し込みは、事務局

**〒669-6801 美方郡温泉町井土932-10、
黒井和之まで。**